北区「ＷＡ（わ）のこころ」創生講座　第２回「錦織の美の魅力」
　メインパーソナリティー：能楽師観世流シテ方　河村　晴久　氏
　ゲスト出演者：光峯錦織工房錦織作家　龍村　周　氏

字幕
＜河村晴久氏＞ 　お時間になりました。 　文化庁の京都移転を記念いたしました北区「WA（わ）のこころ」創生講座-文化の WA- 第２回。本日は「錦織の美の魅力」ということで、錦織の龍村周様にお越しいただきましてのお話となります。 　本日、コーディネートを務めます。観世流能楽師の河村晴久でございます。どうぞよろしくお願いいたします。 　では、今日のゲストであります龍村様、自己紹介をお願いできますでしょうか。 ＜龍村周氏＞ 　こんばんは。 　京都で錦の伝統織物を制作しております龍村周です。よろしくお願いいたします。 ＜河村晴久氏＞ 　ありがとうございます。 　この北区「WA（わ）のこころ」創生講座の内容でございますけれども、日本的なものの WA（倭）、あるいは一つ繋がりの WA（環）、あるいはお互い和む WA（和）。 　ローマ字で「WA」と書いておりますけれども、いろんな意味を兼ねてこの形で書かしていただいております。 　まずは地元に伝わるいろいろなもの、お寺もあり、神社もあり、そして伝統産業もあり、伝統文化もあり、芸能もあり、そういったいろんなものに、まずは気づいていただいて、その先を考えてみようという意味で、北区役所の中でこういう会議を作っていただいて、いろんな取り組みをして参りました。 　今年度は、こうして佛教大学さんとともに、対談の形で、地元のいろいろな WA（わ）について考えていくという、こういう企画をさせていただいております。 　今日はそれで、第２回錦織のお話でございます。 　龍村さんのところは、そもそも沢山いろいろご関係がおられましてお父様やらご先代やら先祖代々がずっと錦をなさってますけど、その辺のところから、ちょっとご案内いただけますでしょうか。 ＜龍村周氏＞ 　家系図なんですけども、私は世代的には四世代目になります。 　初代がおりまして、二代に龍村平蔵というのがおりまして、それが私の祖父になります。 　父が龍村光峯といいます。 　よく、皆様には龍村何とかとかいうふうにいろいろとおっしゃっていただいてるんですが、実は 50 年ぐらい前ですけど三つに分かれてしまってまして、ややこしくなっております。 　まあ、京都あるあるなんですけども、うちが会社としては、下に書いてあります「株式会社　龍村光峯」という会社でやっておりますので、それ以外の社名のところだとちょっと違う龍村さんになっ

てしまいますので、知っておいていただければと思います。
＜河村晴久氏＞
　京都はみんな沢山いろんな関係の方がおられますので、それこそ私の河村もぎょうさんおりまして、いろいろややこしいんですけれども。
　先ほどからその錦織ということでご紹介しておりますけど、そもそもこの「錦」というものはどういうものか、その辺からご説明いただけますか。
＜龍村周氏＞
　うちは代々「錦」という言葉を大切にしてきておるんですが、「錦」というのが、古来から「故郷に錦を飾る」ですとか「錦の御旗」ですとか、「錦秋」、最近はね紅葉のことを「錦秋」って言ったりしますけども、美しいものの代名詞として日本人が表現する言葉ですね。
　漢字を見ていただきましても、金に値する。これは帛と書きますが絹織物という意味がございますので、その「金に値する織物」であるということで、この「錦」を目指してものづくりをしていくということでやっております。
＜河村晴久氏＞
　「故郷へ錦を飾る」というのは、実は7月18日もうすぐなんすけど私、「実盛」という能を舞って、老兵がですね、最後の戦に、もう討ち死にするをわかってるのに出ていく。
　そのときにその故郷に錦を飾るというので、赤地の錦の直垂を着て出て行くっていうですね、そういう心意気の曲があるんですよね。
　やっぱり、まさにこのことわざそのものでございますんで、美しいものを、すばらしいものという意味ですね。
　やはりこれ西陣織、西陣のものでございますよね。
　その西陣織という、そちらの方についてまたご説明いただけますでしょうか。
＜龍村周氏＞
　ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんけども「西陣」とは、高度に専門分業化された各工程を担う零細な小企業が密集する地帯ということで、「西陣織」とは、簡単に言いますと職員さんが沢山いらっしゃって、各職人さんが工房を構えていらっしゃって、そこで作られている織物を「西陣織」と言いましょうということで、今はですね西陣織工業組合の商標になっておりますので、よく勘違いといいますか、あるんですが、西陣織という織物があるわけじゃなくって商標ですので、本来は各京都にある織屋さんが、自分のとこで織物を製作されていて、西陣織という商標を付ければそれが全部、西陣織と呼べるということなので、そこはちょっと織り方の問題ではないということですね。
　ただ、応仁の乱以降の職人さんの培ってきた文化ですので、西陣織というのは大切にしていかないといけない文化ではあると思ってます。
＜河村晴久氏＞
　錦自体は非常に古くからの織物ということになりますでしょうか。
＜龍村周氏＞
　錦となると、紀元前の話なんですけども。西陣織というのが確立されたのが応仁の乱以降となります。
＜河村晴久氏＞

実際今日もいろいろお持ちいただいておりますけれども、様々なもの、１番目立っている作品は美術作品でございますよね。それを見せていただけますでしょうか。

これはどういう織物でございますか。

＜龍村周氏＞

うちは織物全般を製作してます。なので、本当に今日お持ちしてるんですけどいろんな織物でいろんなものを作っておりまして、その中でもメインと言いますか作ってますのが美術作品として作ってるものです。

今、額にしている作品は、私の作品なんですけども、ヴィエリチカの宝というタイトルを付けております。

これポーランドにですね、世界遺産でヴィエリチカ岩塩坑っていう岩塩の採掘場があるんですね。行かれた方もいるかもしれませんが、地下が 300 メートルぐらいありまして、中も 300 キロぐらいの広大な岩塩の採掘場があるんですが、その中に、当時の坑夫の方たちが作りました礼拝堂ですとか、彫像ですとか、岩塩で彫られた「最後の晩餐」があったりとかするんですけども、要は当時の坑夫の方たちが祈りの場所を作ったんですね。そのイメージを持って製作いたしました。

本当にこの織物の紋様の様な寛容な感じで塩の塊がございまして、これがキラキラッとしていたので、それを織物で表現したっていう作品でございます。

＜河村晴久氏＞

この画面で見ますとこう見えるんですけど、実際に先ほど目前で拝見しますとすごく立体的なものですね。

＜龍村周氏＞

織物は本当に、縦糸と横糸で作っていく、その重なり合いですので、平面のように感じますが、実際は立体物ですね。ですので、私も立体として織物を製作をしております。

＜河村晴久氏＞

こう見る方向によって全然印象が違ってくると、その光の具合やら、カメラちょっと動かしてみていただけますか。

＜龍村周氏＞

特徴の一つとしては光とか、角度によって表情が変わるっていうのが特徴ですね。

本当は光を当てていただくと変化がわかるんですけどね。

＜河村晴久氏＞

どこの平面的なものでなくてそうこう、生で見せていただくとすごくよくわかるんですけども面白いですね。

こちらの帯の方も拝見いたしましょうか。二つ目の方へ移ってみていただけますか。

＜龍村周氏＞

そうですね後は帯なんかも作ったりしていますね。ちょっと画面のものと持ってきているものが違うんですけども。

＜河村晴久氏＞

この右側の方ですね。そちらを大きく映していただきます。

これはどういう模様でございましょうか。

＜龍村周氏＞
紋様は雷門も昔から雷門をちょっとアレンジしていまして。ちょうど午年の年、に、毎年干支にちなんだ作品を考えていたんですけども、雷門をずっと眺めてたら、馬の顔に見えてきたので鬣を付けまして、馬の柄にしてみました。
ちょうど馬が草原を駆け巡るようなイメージがありましたので、そういうようなイメージで。
＜河村晴久氏＞
伝統的なものに新しい創作を加えておられる作品なんですね。
＜龍村周氏＞
昔から手織の本袋帯を織ってまして、ちょっと今わかりづらいかもしれませんが、袋状に織ってるんですね。
なので縫い目がないわけです。最近よく裏当てが縫ってあって芯を入れてあったりすると思うんですが、これは芯も入れないですし、もう袋状でこのまま織っていきますので、織ったままの状態で使っていただく。そうすることによって、風合いが保たれて、締めたら、その方にフィットして、重さも感じないぐらい軽くなりますし、丈夫なので、袋状に織ってますので、親子３代、４代はずっと使えるようになっていますね。
＜河村晴久氏＞
いや錦っていうのは本当にこう、軽くて薄くてでも張りがあるっちゅうかしっかりしてますよね。
＜龍村周氏＞
能衣装はどうですか。重いですか。
＜河村晴久氏＞
それこそ能の方も、昔のものは軽くて張りがあったんですが最近はやっぱり重くなって参りますね。錦と比べるために持ってきましたが、この左側は能衣装の唐織なんですよね。
やっぱりこの錦と雰囲気が違う。もちろん織物でありますから、それは同じことなんですけれどもやっぱり雰囲気が全然違って参りますよね。
この縦糸、横糸で織っていってその模様のところを、立体に浮かしてあるわけなんですけど、どうしても大きくなるというか厚くなるっていうところはありますよね。
そのお蚕さん自体も、大分昔と質が変わってきたっていうのもあるようですけれども、その昔の細くて張りのある糸と違ってどうも最近ちょっとボテンとしてるって感じが、そういう感じはしておりますんですけれども。
ただ、どうしても繊維の製品というのは、寿命がございますよね。まして能装束のように汗づいて使いますし、着付けるときにも紐で縛り上げるようなことをいたしますので、どうしても寿命が短くなって 50 年酷使すれば、あとは裏でも出して、江戸時代のものでもあるんですけども、なかなか持ちは悪いですよね。
しかし、この錦の方ですと、どれぐらい持ちますかとやっぱり繊維自体の寿命から言えば 100 年ぐらいかなあ、実用に供せられるというと。
＜龍村周氏＞
そうですね。もう保管状態とかねそういうことにもよってしまいますけど、古代のものも残ってますしね。

＜河村晴久氏＞
　有職のものですと、ずっと残っているものが残っていることがございますよね。
　最近ですといろいろと日常に使えるような製品もたくさんお作りになっておられますですね。
＜龍村周氏＞
　織物を制作した上で、いろんなものに展開していくということで、日常に使っていただけるようなものも、もちろん作らないと。経済をまわしていかないといけないじゃないですか。
＜河村晴久氏＞
　結局そのご用に使えるものにならないということなんですね。
＜龍村周氏＞
　本当に祖父の頃でしたら、やっぱり皆さんまだ帯をたくさん締められてたので、帯を一生懸命作ってたりしてたんですけども、今はねそうでもない時代になってますのでいろんな他のものに変えて製作をしております。
＜河村晴久氏＞
　その辺のもう少し近くで映していただいて、それぞれ見せていただけますでしょうか。これはどういうもん。右端にあるのはまさにマスクですね。まさに今のものになりますね。
＜龍村周氏＞
　もう本当に織物ですんで、いろんな物にできますよね。お財布、名刺入れですとか、御朱印帳もありますし、ネクタイもありますし。
＜河村晴久氏＞
　やっぱりこの紋様というものは、先ほどの雷門からの馬の紋様のようにいろいろと元があって創作なさっているものですか？
＜龍村周氏＞
　はい。すべて創作で作っております。
　もちろん古代のものをそのまま名物裂とかも作る場合もございますし、先ほどのように古代の柄をアレンジして作るものもありますし、もう完全にオリジナルというのもありますし、いろいろですね。
＜河村晴久氏＞
　こうゆうのも、そのデザインをいろいろお考えなって作られるわけですね。
＜龍村周氏＞
　がま口の紋様なんかは、昨年東京のミッドタウンで葛飾北斎の「北斎づくし展」というのがございまして、そのときに、北斎の紋様で何か作ってくれっていうご依頼で。
　ただ北斎のグッズってもう本当に５万とありますし、大体、波ですとか富士山で終わってしまうので、それじゃちょっと、ものづくりとしてはつまらないなということでいろいろ調べてましたら、あの「略画早指南」っていう、北斎が描いている漫画本の指南書みたいなものがあるんですけども、その中に構図ですね、こういう模様を書くには、こういう構図を考えてますというような教科書みたいなのがあるんですが、その中に鳥の模様の構図ですね。これを、そのままモチーフにして、紋様に起こして、作った作品です。
　なので北斎先生に指南を受けて錦の織り物を作りましたみたいなイメージで。
＜河村晴久氏＞

じゃあ、錦というともっと古い時代の感じがするんですけど、その江戸時代的紋様になってきて、しかもそれも超現代的な感じがいたしますね。面白い工夫ですね。

＜龍村周氏＞

紋様を語るといろいろたくさんあるんですけど、その赤いお財布ですけど、これはアンモナイトの化石に、縫合線という模様が現れるんですけども、その縫合線を見ていたらちょっと面白くなってきまして、このままこれを紋様模様にしようと思って。

友人に化石ハンターとかそっちのマニアックな人たちがいまして、そういう影響もありましたね。アンモナイトの縫合線の紋様です。

他にもね、いろいろありますけど。

＜河村晴久氏＞

その黄色いのはどういう模様でございますか。

＜龍村周氏＞

干支にちなんだものをずっと作っていまして、今年寅年、寅の紋様として製作したものです。ちょっと唐草紋様を合わせたものなんですけども。これでちょうど 12 支揃いまして。12 年間、毎年作ってます。

＜河村晴久氏＞

12 支、私も全部拝見しましてそれぞれ特徴があって面白い。作ってられるわけですね。

それこそ大きな緞帳をお作りになってたり、劇場のサンケイホールでございましたかな。タペストリーであったり、それからこういう小さいものがあったり、本当にいろんな種類のものを次々お作りになってますですね。

この錦っていうのはこの伝統的なものでありつつ、こういう斬新なものもどんどん作っておられるっていう、本当にもう時代に合ったものをお作りになりますんですね。

その材料も今持ってきていただいてますけど、その制作過程についても教えていただけますか。お蚕さんからございますね、

＜龍村周氏＞

ちょっとザッと。今、こういう、お持ちした以外にもグッズですとかね。

＜河村晴久氏＞

こういうものをご説明いただけますか。

＜龍村周氏＞

こういういろんなものを、これ緞帳ですね。緞帳ですとか、打掛は、これは父が昔作ったものですけども、本当にいろんなものを作ってまして。

制作のお話をいたしますと、錦織の世界は日本伝統文化の世界も全部そうなんですけども分業の世界ですね。

特に織物は、工程数が多くてですね、工程ごとにそれぞれの職人さんがいらっしゃって、その連携で作られていくというのがこの世界でございます。

大体、主な工程は 12 工程で、人の手の違う工程を細かく数えていきますと 70 工程ぐらい、70 工程以上はあるんじゃないかということで、職人さんたちの仕事のおかげでこういう織物ができるということですね。

これは、ちょっと見にくいかもしれませんが、工程表ですけども、もう本当に蚕さんから織るところまで、非常に多くの工程を経て、織物が作られていきます。
＜河村晴久氏＞
70 行程で、人が違うというとそれだけ人数がいるということですね。
それぞれが別々のことをなさるですね。
＜龍村周氏＞
はい、それぞれが高度な専門技術を持った職人さんたちで、作られているということですね。
何であのどうしてもテレビなんかですと、織ってる場面がどうしても映ってしまいますが、織ってるところっていうのはあくまで最後のアンカーでありまして、それと同じように大切な工程と職人さんと技術があるから、織れるんですね。
＜河村晴久氏＞
まずはその設計図というか全体構想を練り上げられてそしてそれぞれの工程の方々に引き継いでいかんならんということになるんですね。
＜龍村周氏＞
今日もお持ちしてるんですけど「紋意匠図」というのがありまして、それがその企画から設計に移る全体説明のところです。
＜河村晴久氏＞
こちらですね。
＜龍村周氏＞
そうですね。これが先ほどご覧いただいた帯の設計図ですね。
これグラフ上になっておりまして、縦糸と横糸の関係で、織物はそのまま交わる点のお仕事ですので、点でどのように織ものを表現するというのを考えるんですね。
縦糸と横糸で作っていくので、その組み合わせ方を「織物組織」と言うんですが、その「織物組織」も考えたりですとか、こういう何ですかね織り物をでこぼこしたようなところは全部「織物組織」で構成されているので、そういうことをどうするか、どういう表現するかっていうのを考えたりですとか、配色ですね、色もここで考えますし、いろんな情報をこの「紋意匠図」というもので考えていきます。
これを基に、これを見ながら、織り手さんは織っていきますので、非常に大切な工程ですね。
＜河村晴久氏＞
先ほどのように古い紋様の上に新しい紋様があるというのは、つまりこういうもので全部マスを埋めていって、それをご自身で考えて書いていかれるという。
＜龍村周氏＞
これはこれで職人さんがいらっしゃるのでね、職人さんに指示をしまして。
＜河村晴久氏＞
そのデザインなさったよう、職員さんにこれに移してもらうとか。
そして、ここから次またお持ちいただいている紋紙の方に移っていくわけですね。
上の左の方ですね。
＜龍村周氏＞

うちは高機などで、またご覧いただきますけど高機という手織の織り機で、織っているんですが、ジャカードというのが上に乗っかってまして、その紋紙を使って織っていきます。この紋紙っていうのは今で言うと、プログラミングですかね、この穴の空いているところに通じている、縦糸が開いたり閉じたりするわけですね。

それを指示するプログラムのカードですね。これを使ってます。

これもなかなか今は使われなくなってきてまして、非常に危ない状況かなというふうに思ってますが、うちは代々ずっとこれを使っていますね。

＜河村晴久氏＞

これ同じ模様の繰り返しならば少ないでしょうけれども、こういう美術作品や何かお作りになると、膨大な枚数になりますね。

＜龍村周氏＞

はい。もう１万枚とかね、ありますし。

＜河村晴久氏＞

その本当に同じ模様の繰り返し、これぐらいで同じとか繰り返しならば、同じので回るわけですね。

次は絵はどちらが出てくるのかな、そのお蚕さんのところから糸ですね。実際はこうして、お湯の中へ浸けて、あるんですね。

＜龍村周氏＞

これの画像は比較的昔の方法ですけども、昔からこういうふうに。

＜河村晴久氏＞

昔のと今はどんな感じで。

＜龍村周氏＞

今はもっと機械でやっていて、これ「座繰り製糸」というちょっとマニアックですけど、手で引いていくような製糸の方法ですけども、こういう繭から糸ができていくわけですね。

ちょっと画像ではわかりにくいかもしれませんけど、この左の光沢がない方の糸は生糸。生の糸、生成りの糸ですね。

それを精錬という工程があるんですけども、この生糸についているセリシンという成分ですとか、不純物を取り除く作業というのがありまして、それを取り除くと皆さんがイメージしてるような光沢のある糸になっていくんですね。

＜河村晴久氏＞

それを今度は染められる。

＜龍村周氏＞

そうですねそれを染色したら、その赤い色みたいなものになりまして、その他にも織物は錦糸も使いますし、左にあります箔なんかも使ったりしますね。

＜河村晴久氏＞

これが箔ですね。これは金箔を置かれて、紙の上へ箔を漆ですか。

＜龍村周氏＞

昔はそうですね。漆で金箔をつけて、それを画像のように糸状に裁断いたしまして、その一本一本を織り込んでいくっていう技法ですね。

＜河村晴久氏＞
　これ今写ってる下の方は、その上の箔にさらに模様が付いてます。
　上の方がその金箔そのものでございますね。
＜龍村周氏＞
　そうですね。
＜河村晴久氏＞
　それこそ能装束にもこういうのが織り込まれるんですけど。昔のその手で切ってられるその風合いっていうのはとてもよろしいですね。
　逆に言ったら揃ってないと言うとおかしいですけど、ちょっとずつ皆こう雰囲気があるんですよね、そういうものを織り込みますと。だから何かまたと二つとないというふうなそういう感じがいたしますね。
　これはしかし非常に薄いものですね。これを携わるだけでも大変ですけど、これを織り込んでいかれるというのが大変なものですね。
　これやはり、箔を置く方、切る方、織り込む方、皆それぞれご専門ということですね。
＜龍村周氏＞
　そうですね。箔を作る職人さんは、いらっしゃるんですけど、切る職人さんがいまして、切り屋さんって言うんですけども、その方々がちょっと人数が、少なくなってしまって。
＜河村晴久氏＞
　この辺のご説明いただけますか製糸から。
＜龍村周氏＞
　はい。これは先ほど言ってました、ちょっと液体だけですけど精錬と言って不純物を取り除く作業ですね。
　これがセリシン。絹糸の断面図は顕微鏡で覗くと不定形の三角形をしてましてですね、その周りにセリシンというのがついてまして、それを取り除くということですね。
＜河村晴久氏＞
　綺麗だと何とも言えん音はしますね、この衣擦れっていうんでしょうか。綺麗になって、うん。
＜龍村周氏＞
　そういうことも大切で、ずっと最初から最後まで、絹糸を扱うので、その職人さんたちはそれぞれやっぱり美しい状態を保ちながら、次へ次へ渡らせていかないといけませんで、それが技術の一つなんですね。
　これがこう次に渡るときにボロボロになってたら、そのおっしゃるようないい音とかが出てこないので、風合いですとか、なのでいかにこう美しく絹糸を保ったまま織りまで行くかっていうところで、そこで技術が分かるっていうか。
　この糸染めもそうですね。ただ染めればいいということではなくて、絹糸を美しく保ったまま染めるということが大切です。なのでこの場面っていうのは糸さばきっていうんですけど、この糸をさばく技術が上手な方ほど、やっぱり名人と言いますか、職人さんになりますね。
＜河村晴久氏＞
　単にドボっと浸けたら良いというものではないんですね。

＜龍村周氏＞
　そうですね。プラス、こちらが指示をした色と同じように染めないといけませんので、そういうところも技術の経験からくる技術の一つですね。
＜河村晴久氏＞
　それを巻き取っていかれるんですね。
＜龍村周氏＞
　これは縦糸を作る工程ですけども、ここにも職人さんがいらっしゃいます。
　これ先ほど言いました織物組織ですね。こういう縦糸と横糸の組み合わせ方があるということです。
＜河村晴久氏＞
　これによって光沢が出てきたり。
＜龍村周氏＞
　そうですね。これ先ほどの紋意匠ですね。織るとこういう感じです。
　ちなみに金銀に見えるところが箔ですね。
　先ほど言ってました高機というのはこういう機でありまして、上に乗っかってるのがジャカードという縦糸を上げ下げする装置。
　その装置に、先ほどの紋紙を取り付けて使うんですけどね。
＜河村晴久氏＞
　そういう生地が織られているところへさらにこう、紋様の糸が入っていくということですね。
　実際、私も工房に参上しましたけど、おっきなもんですねその装置が。とっても背が高いし、空間がないと。この写真で見るとそうも見えないんですけれどもね、実際近づくとものすごい大きなものですね。
＜龍村周氏＞
　この上に乗っかってましたジャカードがこういう感じのものですね。
＜河村晴久氏＞
　あるとこないとこ、つまりデジタルの「０と１」の世界ですねこれは。
＜龍村周氏＞
　これがコンピューターの原点って書いてますが、明治時代にジャカードさんという方が、フランスで発明されて世界的大発明だったんですね。
　これが後のコンピューターになってきます。なので、本当に世界的な大発明。
＜河村晴久氏＞
　それが一番日本の伝統的な織物にこのまま応用できているということですね。
　これ以前のものっていうのは、あの絵を見たことありますけど、上にももう１人人がいてという。
＜龍村周氏＞
　そうです。上に人が乗っていて、上の人がこのジャカードの役割をしてたので。
＜河村晴久氏＞
　上に人がいて、下の人が織ってという、あれは息を合わせてというか大変な作業だったんですね。
＜龍村周氏＞

空引き機というね。
＜河村晴久氏＞
農装束も皆そういうのでやっておられたみたいです。
＜龍村周氏＞
そうですね。はい。
＜河村晴久氏＞
実際、幾ら機械化されたとは言っても、やはり織るのは手でなさる仕事ですよね。
＜龍村周氏＞
はい。特にうちが作ってますような織物はこういう高機でないと作れませんので、非常に大切な機械ですね。
＜河村晴久氏＞
人を変えてはその杼を入れられる。今日も杼も持ってきていただきました。
＜龍村周氏＞
杼は横糸を通す道具ですけども、本当にいろんな種類がございまして、機の種類ですとか、どういうふうな織物を織るかによっても違いますし、本当にいろんなものがありますね。
＜河村晴久氏＞
この杼を作られる方の人数が減ったとか以前聞いたこともございますけど。
＜龍村周氏＞
そうですね伝統的な手法で、素材で、この杼を作る職人さんが今最後の１人になってまして。
＜河村晴久氏＞
もう１人だけですかね。
＜龍村周氏＞
杼を作る職人さんはいらっしゃると思いますが、その伝統的な素材というところで言うと最後のお１人で、昨年で 88 歳とおっしゃったので多分、まだ元気でいらっしゃいますけど。この材木が宮崎県の赤い樫の木なんですね。
祇園祭の京都の鉾の車輪が同じ宮崎産の赤樫なんですけども、昔はそれを分けていただいて、蔵で乾燥させて使ってたっていうことですね。
＜河村晴久氏＞
それは硬い方ですかね。
＜龍村周氏＞
はい。硬いですね。
この画像のその糸が出ているところですね、白いところ。
これが清水焼です。
＜河村晴久氏＞
焼き物が嵌っているんですか。
＜龍村周氏＞
はい。ここも、これを作る職人さんがいらっしゃるので。
こっちの左の写真なんかでも竹を使ったりですとかね、コマをつけたりとかするんですけど部品ご

とも職人さんが違いますので、いろんな一言で杼と言ってもいろんな技術の集合しているということですね。

元々織り手さんの使う道具ですからオーダーだったり、料理人で言うところの包丁みたいなもんで、同じような形でもちょっと薄くしてくれとか軽くしてくれとか、ちょっとこう削ってくれとか、そういう細かいオーダーをして作ってもらってたということですね。

道具ってそういうものだと思うんですけど、中々作る職人さんが。

＜河村晴久氏＞

でも、結局数がないと、お仕事になりませんもんね。

＜龍村周氏＞

そうですね。中々うちは後でお話するかと思いますけど古代の織り物を復元するお仕事もありますので、やっぱりこういう道具も非常に大切で、何か事あるごとには、ちょっとお話聞きに行ったりはしてるんですけども、こういう感じですね。

＜河村晴久氏＞

実際に織ってられるところですね。

錦織の特徴ってどういう点がございましょうか。

＜龍村周氏＞

これはもうよくお話してることなんですけど、うちは代々古代の織物の研究がメインでして、初代から名物裂ですとか正倉院裂とか、そこら辺の古代の売り物を学んで復元をして、それを現代に生かす。技術作品を作るっていうようなことでやってます。

その研究をしてる中でいろいろ分かることっていうのが、いろんな学問が含まれているんだなということで、ここに今書いてますこのほかにもたくさんあるんですけども、そもそも織物は数学で成り立ってますので、縦長が何本あって横糸何本入れて、その密度をどうするかですとか、糸の複数、太さ細さをどうするかとか、そういったことも全部計算、計算で作っていくので、まさに数学のお仕事ですね。私は数学は苦手なんですけど。数学をやってる方は楽しいんじゃないかなと思いますけどね。

もちろん文化とか美術とかいろいろありますし、お蚕さんはそもそも生物ですから、生物学というか、そういうところも必要ですし、糸染めなんかはこの染料とこの染料を調合してこの色を出すっていうことで、科学だったりしますね。

そういうふうなことで、本当にいろんな学問がありまして、それらを総合的に研究していくというのがうちのお仕事ですね。

＜河村晴久氏＞

こういう、全てのものはいろんな学問の集合体で、結局その背景にあるのは文化。

＜龍村周氏＞

そうですね。

＜河村晴久氏＞

日本で育まれてきた文化、感性みたいなものがやっぱり一番、元にあっていろんなものにこう影響をしてるんですね。

＜龍村周氏＞

そういういろんな学びから得たことをこう生かしていくんですけど、特にうちの織物なんかは先ほ

どちょっとご覧いただきますけど、光とか角度によって表情が変わっていったりするような織物ができたりですとか。立体ですね、織物は立体であるという。
＜河村晴久氏＞
　これは京都の迎賓館でございますね。
＜龍村周氏＞
　そうなんです。これは迎賓館の主賓室に飾ってます。
　この写真もぎりぎりですけども、主賓室ですね。一般の参加一般ツアーでも、入れないお部屋ですけど、そこに納めさせていただいております。
　ちなみにこっちは何枚か織ってるんですけど、最初に納品したのは東宮御所（赤坂御所）ですね。ちょっと東宮御所のお名前がなくなってしまったのであれですけど。
　そして紋様ですね。
　これ質感も大切ですね。これいつもだますんですけど、この織物なんです。
＜河村晴久氏＞
　いやこれ私も初めて拝見しましたけどびっくりしました。これが織物という感じですね。
　これはいろんな本当味わいがこれ、出てくるんですね本当の木のように見えました。
＜龍村周氏＞
　近くによると、織物だってわかるんですね。
＜河村晴久氏＞
　側へ寄って見ると縦横の糸が見えてくるんですけどもね。
＜龍村周氏＞
　あと風合いですね。先ほどのこの糸を美しくしていかないとっていうことで、これが全て風合いにも関わってきます。
　色彩ですね。
　はつり。これちょっと専門的になるんですけど、点の仕事なので、実際織物の曲線っていうのは、階段状になってるんですね。
　それをいかに織物的に面白く表現するかという、ただ綺麗にするだけじゃつまらないので織物的にこの曲線とかそういうのをどういうふうに表現していくかというのをいつも考えてるんですが、その部分をはつりっていうんですけども、こういうことも大切にしております。
　ちなみにこの作品は、父の作品ですけども、雅子様の御婚礼の時のお支度品の掛袱紗として作ったものです。
＜河村晴久氏＞
　めでたい松の紋様になってますんですね。
　そして、その総合研究所というところで古いものを掘り起こし、復元なさるんですねこれ。
＜龍村周氏＞
　今までお話したお仕事なんかは全てこの研究から始まってまして、この財団にしたのは父からなんですが、復元の事業を中心に今はいろんな事業をしていますけども、うちの一番の核となっているお仕事というのは伝統織物を継承するということですので、この復元事業を大切にやっております。
＜河村晴久氏＞

代々さんが、それをやってらっしゃるんですね。
これが初代の平蔵さんですね。
＜龍村周氏＞
これが二代龍村平蔵ですね。
この２人が凄くてですね、もう本当にありとあらゆる名物裂ですとか正倉院裂とかの名品をほとんど復元してしまってまして、今私探すの大変なんですけど、復元する品がないんですね。
＜河村晴久氏＞
正倉院の中で保っておられるというのは、それこそその 1000 年以上のものの繊維がきちんとわかるんですね。
＜龍村周氏＞
そういうようなものを分析解析して。
＜河村晴久氏＞
顕微鏡を使ってとかそういう世界。
＜龍村周氏＞
そうですね。そっからまた文化的な背景ですとか、そういうところも学んでということですね。
これなんかは、今、画像に映ってますのは、四騎獅子狩文錦というのですが、染織品としては国宝第一号で、よく国宝展なんがあるじゃないですか。それにたまに、本当のオリジナルのものが出たりしますけど、その復元ですね。
これ花樹対鹿文錦っていうんですけども、昔、大谷探検隊っていうのがトルファンから持ってきた、この画像が実物の画像ですけども、これのミイラの面覆いなんですね。これを復元したのが右側の花樹対鹿作品ですね。
今こういう、ちょっと宣伝ぽくなっちゃいますけど祖父が錦とボロの話っていう書籍を出してまして、もし、本当に詳しくお知りになりたいという方はぜひこの本を読んでいただければとても面白いと思いますね。
＜河村晴久氏＞
こういうその古代の技術っていうのは、やはり非常に高いものですか。
＜龍村周氏＞
非常に高いですね。
＜河村晴久氏＞
ずっと途絶えてしまっていたということになるんですかね。
＜龍村周氏＞
いえ、ずっと続いてますね。
なので、織物的に考えると 1000 年ぐらいじゃそんなに昔じゃないんじゃないか、そういう感覚になってしまって。1000 年、2000 年じゃもう最近みたいなイメージ、つい最近で、昨日とか２、３日前みたいな感覚に陥ってしまいますけどね。
＜河村晴久氏＞
ずっと続いてるんですね。
＜龍村周氏＞

こういう聖武天皇の一周忌のときの道場幡の垂脚の止め飾りね、こういうの。
つい使ってた織物を復元したりですとか。
＜河村晴久氏＞
それこそ正倉院展に行きますと元のが並んでて、そこんとこ日付が入ってましたよね、その大仏開眼供養のまさにその天平勝宝４年752年の４月９日って書いてありましたよね。
そうすると本当にそこにあるものが記録上にあるもんと同じものがあって、現にあると。そしてまたそれを復元もよくそろえてられますでしょ。ああ、なるほどこういうものがずっと続いてるんだなとちょっと感激するんですよね。
こちらも能装束使う立場ですのでね、昔のものがそのまま着られる状態になってるということは、とっても嬉しいそういうもんです。
これは奈良時代ですね。
＜龍村周氏＞
で、これは平安時代ですね。
＜河村晴久氏＞
これは神護寺さんのところからですか。
＜龍村周氏＞
神護寺そうですね、今も博物館にあるんですけど、もともと神護寺の経帙（きょうちつ）っていうお経を包む巻物ですね、その周りの縁切れを復元したものですね。
＜河村晴久氏＞
色彩感覚が本当に面白いですね。この古い時代のものは。
＜龍村周氏＞
いやもう本当に、すごい美的感覚がすぐれている方々がしっかり作ってらっしゃるっていうふうに思いますね。
＜河村晴久氏＞
そうですね。全然古くないという、斬新ですね。ほんと今の時代にまたそのまま使えそうな感じがしますね。
＜龍村周氏＞
こういう研究をしていると、白黒の方ですけど新疆ウイグルのウルムチから同じ文様の織物が出土されてたりするのが見つかったりとかですね。
なんで、片や、日本の神護寺にあって片やウルムチにあるみたいな、ことなので、当時からそういう交流というか、盛んにあったんじゃないかなっていうのが推測されますけどね。
＜河村晴久氏＞
その日本の伝世品つまりずっと保存されてきたっていう、埋まったんじゃなくて、ずっとあり続けるという。これまたすごいことですよね。
＜龍村周氏＞
そうですよね。
＜河村晴久氏＞
残り続けるというのも。

＜龍村周氏＞
これは室町時代ですけども、国宝の阿須賀神社伝来の古神宝の裂で、これは鏡の袋として使われてたものです。
＜河村晴久氏＞
古神宝になると大切に、ずっと残るということですね。
＜龍村周氏＞
そうですね。
ただ織物を復元するというのが目的ではなくて、ここにある芸術とか、道具ですとか、機の仕掛けですとか、いろんなことを文化的なことも含めていろんなことを学んで、それを元に物作りをしていくと。
で、プラス製作しますので、その仕事を職人さんに出すことができますから、伝統織物の技術を継承していくっていうところにも、繋がりますし、そこに後継者がいたら後継者育成にもなりますし、まずそういうことを含めてやっている、復元の事業ですね。
＜河村晴久氏＞
結局その研究して、仕事になっていく、お仕事があるということが一番大事なことになりそうですね。
＜龍村周氏＞
そうですね。せっかくある技術ですから使わないともったいないので、いろんなお仕事を職人さんにも出すっていうことが非常に大切ですね。
＜河村晴久氏＞
龍村さんのお仕事って結局その先ほどの書いておられたように、それ全部をこう調整するコーディネートをしていくという、そういうお仕事になりますですな。
＜龍村周氏＞
なので、よくたとえて言うのは映画監督とか、オーケストラの指揮者のような役割ですって言うんですけども、本当に職人さん、いろんな各職人さんに指示をして、やっていただくと。それで一つの作品を作り上げていくというのが、この世界ですね。
＜河村晴久氏＞
日本的なものって皆そうで、それぞれのものすごい専門家の方が、それぞれがバラバラにおられてそれをこうまとめなければならないっていう。
＜龍村周氏＞
はい。
＜河村晴久氏＞
何かいろんなものがそういう構造になっておりますね。
＜龍村周氏＞
そうですね。
お能の世界でも本当にいろんな、本当にいろんなこう細かくスペシャリストの方々が。
＜河村晴久氏＞
舞台の上に立つのも全部それぞれ専門別々ですし、またその、それこそ装束は装束で専門のところ

へお願いするし、楽器は楽器で皆それぞれ専門でいらっしゃいますし、能面もそうです。皆そうなんすけど、後継者がおられないという、いや、結局仕事がないからとそこへ繋がるわけなんですけどね。

能楽師の立場からしたら、せいぜい能を見に来ていただいて、お客様が増えれば仕事が増えると、こうくるし、着物でもせいぜい着ていただければですね。

こういう龍村さんのお仕事を承ってて、いろんな工夫して違う製品もたくさん作っておられて、どうしてこう日常生活が変えれるようにしようかっていう、工夫がたくさんあるんだけれどもやっぱり根本は、着物文化そのものになって参りますよね。民族衣装としてのものが、皆が普通に着るようになれば、お仕事が増えるのですよね。

だけど、それを本当にこのいろんな製品作ってられますとともに、やっぱり次世代の人たちに伝えていくっていうことから、新しい作品もそうですし、私も工房見学いたしまして、ああして工房を開けて、いろんな人に見てもらってられるという、あれも面白い良い試みですね。

＜龍村周氏＞

やっぱり子供たちから、そういう環境がなくなってしまっているので、実際に、現場を見ていただいて、実際に機織をしてもらって、織物を楽しんでいただくというところからの発想で、いろんな、今もう本当にアトリエ体験に来られる方もたくさんいらっしゃるんですけども、海外の方も含めていろんな方に来ていただく。で、知っていただくようにしてますね。

＜河村晴久氏＞

どうですか。子供たちも機織するとすごく興味持つようになられるんじゃないですかね。実際物ができるって楽しいですものね。

＜龍村周氏＞

そうですね、本当に、子供たちは特に、器用なので。機織ってこう難しいイメージがあるみたいですね一般の方。ですけど本当は織れるものは織れるので。そういうことをもって、やってみましたら、実際、小学生の高学年の子が全年代で一番上手だったりするんです。体験の中で。それぐらいやっぱり可能性と言うか、能力、もう本当に、この子供たちには、ありますので、やっぱり小さいうちから、そういう、こういう伝統文化に関わっていただくような、環境づくりをちゃんとしておかないといけないですし。

よく、鶴の恩返しの絵本を読んで好きなんだけど、機織って見たことないし、何？みたいな子たちがよく、うちに来られるとか、実物を見て、自分で織って、ていうことをすると本当に楽しんで。１回、着物を着て来ましたからね、子供が。

本当にこの鶴の恩返しのように。なのでそれぐらいやっぱりやると、皆さん楽しいです。もちろんご年配の方も、もう本当に全世代、お越しいただいているので、今後も続けていこうかなとは思ってますけどもね。

＜河村晴久氏＞

いや私の方も学生さん連れて寄せていただいたこともあります。現場を拝見するととても興味が増しますね。

＜龍村周氏＞

特に、こういろいろと、こういろんな先ほどの学問の話ししましたけど、いろんな要素がありますので、決して織物着物だけじゃなくて、別の興味がある部分だけでも全然違うと思うので、ぜひ見に

来ていただければと、思ってます。
＜河村晴久氏＞
　そしていろんな試みなさって新しいものを開発なさってますけども、一番そのせっぱ詰まった問題はその職人さん、現在技術を持っておられる方がとても高齢化してるというところ。
＜龍村周氏＞
　そうですね。
＜河村晴久氏＞
　これはどう解決するのがいいもんでしょうか。
＜龍村周氏＞
　これは本当に難しいテーマで、大変なんですけども。どうにかしてその職人さんに、仕事を出せるようなものづくりっていうのを僕らはしないといけない、ということでいろいろやってるんですけど、一つは今出てます技術の応用とかですね。
　これは先ほどちょっとご覧いただいた箔を織る、という技術を使って、それを、いろんなものに変えていくというような。本当は織物に織るための技術ですけども、それをいろんなことに変えていくということで、たまたまですけども、何年か前に燕市、新潟の燕市の産業資料館が、スプーン展をやる、スプーンのコレクションをお持ちで。そこに。
＜河村晴久氏＞
　カメラをお願いできますか。
＜龍村周氏＞
　そのスプーン展の中の企画で、いろんな作家さんにスプーンをテーマに、何か作品を作るっていう、で展示するっていうので、お電話をちょうだいしまして、織物でスプーン作れっていう、無茶ぶりのお仕事です。
　でもまぁちょっと考えて、思いついたのが、箔の織物を生かして、折り紙のようにして、スプーンにする。
　これは先ほど少しお話しましたけど、土台が和紙ですね、三椏と楮の和紙で、そこに金箔を付けたり、いろんな再集合したりして徐々に裁断をして、一本一本織り上げていくんですけど、その、和紙なので、折れるんじゃないかということで、本当は折れないようにするのが織物なんですけども、これは和紙だから折れるだろうということで、逆に、逆転の発想で、そういう折れるような織物、箔の織物を製作して、折り紙のように折って、スプーンにしてますね。でこれ実際、乾きもののでしたら。お茶っ葉の。
＜河村晴久氏＞
　お茶なんかはできるんですね。
＜龍村周氏＞
　掬えますし。水を使わなければ大丈夫なので。
　そういう作品を作って、そっからの流れで、そこに隣にあります折鶴ですとか。
＜河村晴久氏＞
　これは鶴ですね。
＜龍村周氏＞

あとは現代アート的なものを作ったりですとか。
＜河村晴久氏＞
鶴もうちょっと近づいてみていただけますか、その、はっきりとこう織物であることがわかるんですね、これ。
＜龍村周氏＞
なんで折り（織り）、“オリオリオリ”って言ってたんですけど。
＜河村晴久氏＞
紙だからこそ折れるというところなんですね、箔だから。
＜龍村周氏＞
で、こういうものですとか、あと現代アート的なものにしたりとか、いろんなものに変えていって仕事を作ることによって、この箔を作る職人さんと箔を裁断する職人さんにお仕事を出せるので、そこでお仕事をやっていただくという、いろんな仕事を箔の仕事をやっていただくという、そういうことをそういうものづくりを考えながら、いつもやってます。この中に細かく、職人さんが何気にやっている技法、普段やっている技法がいろいろあるんですけども、その実はちょっと面白かったりするのでそれを生かし生かして、ものづくりに反映させたりとかですね、そういうこともしてます。はい。
＜河村晴久氏＞
いや、これ拝見してるとこんなことができるのかっていう、いろんな、新しい発想なんですね。
＜龍村周氏＞
ただ説明しないといけないですね。説明するのが難しいんですけどね。
＜河村晴久氏＞
でもこうしてお会いして見せていただくと、こんな世界がある。これねその、私どもの世界でもそうですけど、みんな自分の世界の中だけにいますのでね、他の工芸の世界の方と、お話聞くと、繋がりができたらまた新しい道が開けてくるような。
＜龍村周氏＞
そうですね。
＜河村晴久氏＞
そんな感じいたしますね。
それぞれがものすごい技術持っておられるから、そのどう使えるかっていうところ、ちょっと目を変えて違うところで、お互いの考えがぶつかり合うと、また面白いことになりますよね。
ほんとこの和の心と言いますこの和（WA）、皆がこう繋がって、いろんな人とこう出会う機会があれば面白くなりますね。
＜龍村周氏＞
そういう意味では、いろんな職人さんとの繋がりも大切にしてるんですけど、河村さんとかいろんな伝統文化の方たちと繋がることによって、またいろんなものが生まれてくると思うので、そういうこともね、いろいろと大切にして、繋げていかないといけないなというのは、思ってます。
＜河村晴久氏＞
こちらもその装束を使わせていただく立場なんですけれども、装束屋さんがこう作ってくださるのがやっぱり、もうだんだんだんだんとその職人さんもおられないし、仕事少ないし、ということで困

っておられるんですね。だから本当この、何に利用できるか新しいこう、道を開いていくというすごく大事なことと思うのと、それと、やっぱり本来のお仕事有職のその伝統的なものやらっていうものが、知っていただいて、こんなものがあるって世界的に見てもこんなすごいものが伝わってるということを知っていただいて、価値が分かれば、未来はあるのかなっていう。

全然こう触れる機会が知らないとおしまいになるんですよね。ほんともう何かにつけていつも一番思うところで、それこそ能でも知らないうちに無くなったとなったら大変なことなんで、何とかしていただこうと頑張ってるところでございますけども、織物もそうですよね。

＜龍村周氏＞

そうですねうん。

やっぱり今日もお持ちしているのはやっぱり実物を、ご覧いただかないと、やっぱり画像だけでは伝わらない部分というのがすごく大きくて。ぜひ後程、近くでご覧いただければと思います。

＜河村晴久氏＞

会場の方は後で近づいていただいたら。

＜龍村周氏＞

織物って本当に特にもう画像とかでは、わかりづらいところもあるので、ありますし、その機なんかはね、さっきの高機なんかは、持って出歩けませんので、実際のものを見ていただくとか、そういうことも、ぜひ、皆さん来ていただければと思ってますし。

＜河村晴久氏＞

とにかくこう触れていただく機会、見ていただく機会、すると、大抵ね工芸品の場合、触らないでくださいとなるんですけれども、触っていただいてというところがありますねその、風合いがわかるともっと良いですね。そして、本当は来てみるというところまでいくと。

＜龍村周氏＞

うん、いいですけどね。

＜河村晴久氏＞

その地元の学校やら小学校やらでもそういう体験の授業せいぜい組み込んでいただいて、来ていただいて、それこそ、龍村さんとこ北区におられますですから北区のね。近所の学校が出かけて行けるんだったらいいなあという、そういう取り組みそれぞれ地域でどんどんどんどん活性化していきたいなというふうに思います。

＜龍村周氏＞

このコロナ禍になってからちょっと、近くの小学校の子たちが来るようになりましたね。

＜河村晴久氏＞

コロナがかえって近くの方になりましたか。

＜龍村周氏＞

それまでは逆でした。外国とか、地方、地方って言ったらあれですけど、京都以外の方々がこられて、お子さんがですね。コロナ禍になってから本当に近くの方々がお越しになりましたね。

＜河村晴久氏＞

逆に地元の事、足元が見えるようになってそれはそれでいいことですよね。

本当にこの近くにこんなすごい工房があって、作っておられるということを皆知っていただいて、

そして、一番思うのは古くないという、ところなんですね。
＜龍村周氏＞
　はい。
＜河村晴久氏＞
　この斬新な模様があり色合いがありという、これは世界出て行っても全然こうね、雑誌に、今の時代のものと思っていただけるような、色合い、デザインというものがあるわけで、何千年、千年以上続いてるってのはそれだけの、いつの時代の人も魅力に感じるものがあり続けたわけですわね。
＜龍村周氏＞
　はい。
　コロナになる直前は本当はローマに行く予定だったんですけど。
＜河村晴久氏＞
　ああ、そうですか。
＜龍村周氏＞
　まだ延期延期でまだ、決まってませんけど。
＜河村晴久氏＞
　ご先代のときから海外へ、の展覧会って本当によくなさっておられますね。
＜龍村周氏＞
　はいそうですね。なので、私もいろんなところへ、日本の伝統織物を発信する意味でもね、行きたいんですけども、
＜河村晴久氏＞
　またコロナが終わったら、せいぜい出かけていただいて。どんどん日本にはこんなものがあるっていう。
　これからの時代って本当にいろんな争い事があるけど、お互いが文化を尊敬し合えれば、どれほど世界が平和になるかなって常々思うところなんです。
　まずは、それこそ地元の方々がこういう地元のことを知っていただいて、そして自信を持って他の文化の方々と接触できるような、そういう時代を迎えられるようになったらなと思います。
　今日は本当に貴重なお話いろいろと聞かせていただきましてありがとうございました。
＜龍村周氏＞
　ありがとうございました。
＜河村晴久氏＞
　地元、これから北区の和（WA）の発信のこと、次々にまたしていきたいと思いますので今後ともよろしくとともにまた、せいぜい皆さんにご聴講いただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。
＜龍村周氏＞
　ありがとうございました。